

松本清張記念館

◆館報◆

2016.8
第52号

田上耕作が、
この事実を知らずに死んだのは、
不幸か幸福かわからない。



「或る『小倉日記』伝」は、
昭和27(1952)年
『三田文学』9月号に掲載された。

現在入手できる本
『或る『小倉日記』伝』
新潮文庫

『或る『小倉日記』伝』
昭和33(1958)年
角川文庫

目次

- 松本清張研究会第34回研究発表会……………2
- 松本清張研究奨励事業……………5
- 特別企画展「世界文学と清張文学」……………5
- 展示品紹介……………6
- 点描 作品の舞台を訪ねて……………6
- くろずみ清張公園……………7
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

昭和一五年、詩人のK・Mは、小倉市に住む田上耕作から一通の封書を受け取った。耕作は、森鷗外が明治三二年から小倉市に滞在した二年一〇ヶ月について

調べており、その一部を見て欲しいと送ってきたのだった。

耕作は、体こそ不自由であったが、頭脳は明晰で、地元の指導的文化人である白川慶一郎のもとに出入りし、資料調査の手伝いなどをしていた。ある時、鷗外の小倉時代の日記が散逸したことを知り、失われた空白を、当時流行し始めた民俗学の調査方法で「資料採集」し、埋めていくことを思い立つ。耕作は、鷗外の調査に打ち込んだ。鷗外がフランス語を学んだベルトラン神父や、朋友・玉水俊雄の未亡人、元門司新報支局長・麻生作男など、小倉時代の鷗外を知る人物に取材し、鷗外像や交友関係が明らかになっていくにつれますます情熱を燃やした。

資料が嵩を増す一方で、耕作の病状は悪化する。昭和二五年の暮、鷗外が「冬の夕立」と表現した空模様の日、ついに息を引き取った。東京で鷗外の「小倉日記」が発見されたのは翌年のことであった。

(専門学芸員 柳原暁子)

松本清張研究会 第34回 研究発表会

平成28年6月4日(土) 午後2時
大阪商業大学(同大学と共催)

講演

松本清張と大阪

講師 石上 敏

大阪商業大学教授



清張作品と大阪

講演に「松本清張と大阪」という大きなタイトルをつけてしまったが、清張作品に登場する「大阪」の描写は非常に少ない。京都や奈良、兵庫といった関西の他の地域を舞台に、清張はたくさん書いていたが、なぜか大阪は出てこない。色々探してみたが、見つかったのは『砂の器』で犯人の足どりを追う今西という刑事が、大阪の浪速署を訪れるくだりくらいだった。清張が敬愛した森鷗外も、『大塩平八郎』で当地東大阪を舞台にした一場面を描いている。東大阪市を含む河内地域は、古代から難波宮(なにわのみや)を支えた穀倉地帯であり、様々な文化を生み出してきたところである。ぜひ清張にも当地を題材に何か書いてほしいかと悔やまれる。

司馬遼太郎と清張

他に何か清張と大阪に縁がないかと考えると、やはり当地東大阪ゆかりの作家である司馬遼太郎に助けをもらおうしかない。

清張と司馬には交流があったと考えられるが、清張が当地の司馬の許を訪ねてきた形跡はない。司馬は対談集を出すほど対談を盛んにした作家であり、よく同じ相手と何回も繰り返し行なったようだが、清張との対談は数少ない。二人は決して仲が悪かったわけではなく、このときの写真(対談風景)にもあるとおり、仲睦まじくお互いに心を許しあつた感で座っている。もちろん、あれだけの作家同士のため相容れない部分もあったかもしれないが、今日残っている二人の接点がこのように少ないことには、腑に落ちないところがある。

1980年代の作家の所得・納税額番付を見ると、前半はこの二人が上位に載っている。これは多くの人々が、この二人の作品を読んでいたことを示している。その後、赤川次郎が現れて一位を独占することが続き、司馬と清張は徐々に順位が下がっていく。80年代の終わりに、村上春樹や吉本ばななが登場している。この頃は清張の最晩年に当たるが、それでも亡くなる直前まで精力的に執筆していたことがわかる。

92年に清張が、4年後の96年に司馬が他界した。清張の誕生日には諸説あるようだが、その一つが「2月12日」である。奇しく

もこの「2月12日」は司馬の命日でもあり、毎年当地では「菜の花忌」として盛大に祀られている。

今東光と清張

もう一人、東大阪市の南に隣接する八尾市にゆかりのある、今東光についてお話ししたい。東光は僧侶や政治家としても有名であるが、河内の人々や文化について、愛着を持って大いに描いた小説家である。

文春の講演会の際、この今東光に清張が東北まで同行している。このときに宿で和気藹々と話が繰り広げられた様子を、今東光の弟子である瀬戸内寂聴が回想している。そこで戯れに描かれた色紙(清張・東光の相合傘を瀬戸内が取り持つ図)も残っている。

今東光にはどうしても河内のイメージが強いが、元々は横浜の出身である。それぞれ小倉と横浜という港町出身の二人には、相通じるものがあつたのかもしれない。

また、江戸時代の浮世絵師である写楽の正体については諸説あるが、清張、東光はいずれもそれが「能楽者の斎藤十郎兵衛」だとしている。このように歴史考証の力も、二人の共通点と言えるだろう。

東光が他界した際、清張は「今氏のヒューマニティは万人の支持を受けているから、一握りの権力者も悪者も手出しがでないのである。」との言葉を贈っている。

講演

戦前の天皇制と超国家主義

松本清張はどう捉えていたか

講師 綾目 広治

ノートルダム清心女子大学教授



はじめに

本日は戦前の天皇制と超国家主義を、松本清張がどのように捉えていたかという内容について、お話ししていきたい。

戦前の天皇制についての経済的な面からの分析は、1932年頃にはいわゆる講座派のマルクス経済学者や歴史家たちによりなされている。それらを要約すると、明治維新以降もまだ半分は封建的な要素が残っており、その半封建的要素と資本主義的要素との均衡の上に立っていたのが、戦前の絶対主義的な天皇制であるとの論考である。

このように、戦前の天皇制についての経済的側面は経済学者らによってほぼ明らかにされていと言えらる。しかし、あの15年戦争で猛威を振るった、人々の精神をも支配し縛り続けるような天皇制のあり方についてまでは解き明かされていなかった。そこで、なぜあの狂気じみた戦争動員体制が天皇の名のもとに可能になったのかというこ

とを、天皇制国家の上部構造の問題から追
ろうとしたのが、松本清張である。

『象徴の設計』から読み解く 清張の天皇制観

『象徴の設計』は、清張の天皇制観の重要
な面が語られているとされる作品である。
物語の主筋は史料を元に構成された歴史小
説の一種であるが、その中に登場する人物
の会話などには、フィクションが盛り込ま
れていることで読者はよりリアリティを感
じる。

物語は、給与削減に反対する近衛砲兵連
隊兵士たちが大隈重信邸等で発砲した実
際の事件である「竹橋事件」から始まる。こ
の騒動が自由民権運動と結びつくことを
恐れた山県有朋は、軍人たちが拠り所とす
る「精神的な象徴」が無いことが問題の本
質であると認識した。そこで有朋は「軍隊
の信仰を天皇に置く」ことを思いつき、「天
皇の人格を神にまで形成させる」ことを
考えた。西周の起草による当初の「軍人勅
諭」は理性的で哲学的であったため、それ
を有朋らが「荘重な字句」と「天皇の口移し
的な言葉」とを織り交ぜた文言、すなわち
神社の「神主の祭文」と酷似したような文
体へと改めていったのである。この完成し
た「軍人勅諭」により、「軍隊は天皇に直結
し、(略)殉死的な「忠義」を強制すること
ができる」ようになった。これが「統帥権の発
生」である。ここで清張は「しかし、有朋は、
無意識に一つの作業を成し遂げたのだ。軍
隊が天皇に直接従属することは、天皇を抱
えこんでいる藩閥政府官僚に軍隊を密着さ
せることであった」(傍点・引用者)と記述し

ている。ここで注目すべきは「無意識に」と
いうところである。

天皇が神格化された存在になったとし
ても、その天皇を操るのは藩閥政府、つま
り山県有朋であるという構造が語られて
いるが、有朋自身もそのことをはっきりと
自覚していなかったのではないかという
表現である。これは足軽出身である有朋ら
の、自分たちが天皇を「ここまで押し上げ
たと思っている」が、一方で「その幼沖の天
皇を押し上げた先輩はもとより、それを引
き継いだ彼自身をはじめ、すべての人間が
天皇を持つことによつて今日まで及んでい
る」、「誰もが天皇に感謝しなければなら
ないのだ」といった意識を、清張が描いたも
のである。ある意味で、有朋らは明治維新
を起した自分たちの天皇への気持ち、兵
や国民にも押し付けたとも言える。支配者
側にとつて戦前の天皇制は絶妙な作品で
あったが、それがすべて明確な意図によつ
て設計された構築物であったとはいひ切れ
ず、まさに無意識的につくり出された部分
もあるのだと清張は考えていたのではな
いか。この「軍人勅諭」を元に「教育勅語」、
さらには「大日本帝国憲法」が制定されて
いった過程が、『象徴の設計』で語られてい
る。一般的に、天皇は戦後の日本国憲法に
よつて「象徴」になったのであつて、戦前の
大日本帝国憲法では「主権者」であつたと
いう見解がある。しかし、戦前において確
かに天皇は主権者であり支配者であつた
が、それと同時に象徴的機能も果していた
と捉えることができる。

要するに、戦前の天皇制は藩閥政府によ
る作爲的な構築物であり、「現人神」信仰は
まやかしかつたというものが清張の認識で

あつた。

このように『象徴の設計』は、戦前の天皇
制が人為的に作られたものであつたこと
を、わかりやすく語つた小説であるが、な
ぜ国民がその象徴物を素直に受け入れたの
かという問題までは、清張も追究していな
い。ただし、この辺りについては、イタリア
のマルクス主義思想家であるグラムシが述
べたような、国家の支配に対して治められ
る側も能動的に合意するという働きや、戦
後に思想家である神島二郎や後藤総一郎
らが述べたような、土俗的・民俗的信仰が
そのまま天皇信仰につながっていく仕組み
を考えてみると、清張による考察を経ずと
もほぼ明らかである。

戦前の天皇制と新興宗教

ところで、思想家である久野収や鶴見俊
輔が共著『現代日本の思想』で述べている
とおり、戦前の天皇制には仏教で言うところ
の「顕教」の面と「密教」の面とがある。
前者では天皇を神格化し、絶対の権威と神
権をもつ存在として捉え、後者は山県有朋
ら元勳が解釈したように、天皇をあくまで
「制限君主」と捉える考え方である。これら
両者の微妙なバランスで運営されていた
のが明治以降の天皇制であつた。しかし、
昭和に入つてからはその「微妙な運営的調
和」が崩れ、「顕教」的な面が肥大化してい
くようになる。

これは清張が『昭和史発掘』で描いた二・
二六事件の青年将校たちに端的に現れてい
る。彼らは学校では「教育勅語」により教育
され、軍隊に入つてからは「軍人勅諭」で教
育されているため、天皇制の「顕教」的文言

をまともに信じていた。しかし、天皇自身
や重臣たちは、天皇制の根幹が「密教」的部
分にあるとの認識であつた。このギャップ
が露呈したのが二・二六事件なのであると
清張は捉えている。つまり、天皇の神格化
は構築されたものであるが、重臣たちはそ
れを国民や軍人たちに対して前面に押し出
しつつ、自分たちの間では天皇を制限君主
として意識していたという矛盾が、危機的
な時代に噴出したものだと見える。

ここで興味深いのは『昭和史発掘』の二・
二六事件に関する叙述の中で、青年将校ら
の反乱とは直接関係が無い、宮中の女官が
新興宗教に接近した話も語られていること
である。この前皇后職の女官長であつた島
津ハルという人物にまで筆が及んだ理由に
ついて、清張は「とにかく島津ハル事件の
ようなのが宮廷の周辺に起るのも、それだ
け古代王朝のシャーマニズム的宗教の名残
が揺曳していたからにはかならない」と述
べている。これはおそらく清張が『昭和史
発掘』で天皇制に関わる事件を追つてい
くうちに、『象徴の設計』の分析では捉えきれ
なかつた、天皇制の孕む闇の部分、実はそ
れが新興宗教とも関わりのある問題だと気
付き、そのテーマを後に未完の大作『神々
の乱心』で語ろうとしたのではないかと考
えられる。

つまり清張は、天皇制と新興宗教とは同
質なものがあると捉えており、『神々の乱
心』という、宮中と新興宗教とを結びつけ
るような小説を書くことで、それを表現し
たかつたのではないかと。

このような捉え方は清張だけでなく、高
木宏夫、佐木秋夫、井上順孝といった宗教
学者らにも認められる。いずれも戦前の天

皇制と新興宗教について、「現人神信仰」と「生き神信仰」との類似点、生成時期が幕末から明治にかけてである点、そのカリスマ性や構造等といった面から共通性を指摘している。

清張は1978年時点において、「これは将来のばあいをいう憶測だが、憲法第九条の副文の解釈が拡大されるような事態となったとき、第一条に規定された天皇の儀礼的な国事行為が、儀礼的でなくなり、第九条の副文と合流するのではないか、という遠い空を望んでの杞憂もおこらないではない」と雑誌に寄稿している。これは昨今の日本の状況を見通していたかのように感じられ、驚愕させられる。

超国家主義の捉え方

『昭和史発掘』連載中の1970年、三島由紀夫らによる自衛隊基地乱入事件が起こったが、その際に三島たちが撒いた檄文の文章について、清張は「二二六事件関係の文書との相似が映ってしかたがない」と述べている。

清張は『昭和史発掘』で二二六事件そのものについては十分に書き尽くしたが、この事件で実際には蚊帳の外におかれていたにもかかわらず、思想的首謀者として軍部に逮捕・処刑された革命家の北一輝については、まだ書き足らなかつたのであろう。のちに『北一輝論』としてまとめている。しかし、この『北一輝論』は、北が左翼から出発し国家主義に転じていったとする清張の認識に、誤りがあるという批判を複数の北

研究者から受けている。

北一輝にとつては当初から「純正社会主

義」が「国家主義」と接合・融合しているのであつて、「純正社会主義」から後に「国家主義」に変容したのではない。このことは北が23歳の時に著した『國体論及び純正社会主義』からも読み解ける。やはりこれに関し、清張は間違えていると言わざるを得ないだろう。

清張が北一輝神話を解体し尽くそうとするあまり、どうしても成心の強い解釈になつたのだから、清張の論にも無視できないものがある。北がなぜそこまで天皇に拘るのかという問題である。北研究者である清水元が指摘しているところ、北には幕末の勤皇志士と同じく、「天皇という玉」に縛り付けられているところがある。この問題をこそ、清張は追究せねばならなかつたのではないか。

北と同じく思想家の大川周明についても、清張は『昭和史発掘』等の複数の作品で書いている。大川は、インド哲学を学んだ後に歴代天皇の伝記編纂に携わる中で、日本のなものに目覚めた思想家であり、自身の著書『安楽の門』でもそれを述べている。これを清張は「彼の革命観は、アジアと日本の思想を混合し、精神主義を強調した結果、神が、かり的となつた」（傍点・引用者）とした。

しかし、大川の思想を「アジアと日本の思想」の「混合」で「神がかり的」と言い、きることには慎重であるべきと考える。大川研究者が指摘するように、大川のアジア観には岡倉天心の影響も認められ、大川のイスラム研究については目を見張るものがある。

大川は『日本二千六百年史』の中で日露戦争の悲惨さを表現したが、これを蓑田胸

喜ら右翼思想家たちは不敬、非日本的だと批判している。むしろ「神がかり的」で狂信的だつたのは、大川を批判する側の者たちだつたと言える。

このように見てくると、清張には、超国家主義者の宗教心というものを掬い取つて理解しようとするところが、足りなかつたのではないか。よく知られているとおり、北一輝は法華経を、大川周明は観音経をそれぞれ読誦していた。やはり、日本の超国家主義思想や右翼思想の中で無視できない思想家には、宗教的な要素が多分にあつたのである。

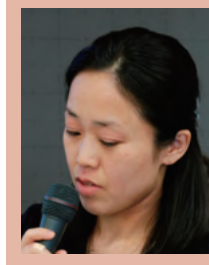
研究発表

イタリアにおける松本清張

レオナルド・チャーシャとの相似性

講師 吉村 法子

立命館大学大学院博士課程



要旨

現代イタリア文学界において、松本清張の作品が翻訳・刊行されているが、日本ではほとんど知られていない。また、イタリアには松本清張と近似性の高い作家レオナルド・チャーシャがいる。

そこで、まずイタリアにおける清張関係の新聞掲載情報や翻訳作品、映像作品等を

まとめ

戦前の天皇制も超国家主義思想も、宗教的な要素を色濃く持っている。松本清張は、戦前の天皇制と新興宗教の共通点を鋭く分析したように、超国家主義思想についても、その宗教的要素を正面に据えて分析するべきだつたと考える。

しかしこれは、超国家主義を唾棄すべき存在であると考えた清張が後世に残した宿題であり、それを解き明かさねばならないのは、むしろ21世紀を生きる我々なのかもしれない。

集成することで、その受容のされ方を調べた。その結果、当時の日本情勢の情報源として清張がイタリアの新聞からコメントを求められていたことや、3つの翻訳作品『点と線』『砂の罿』『黒い空』がイタリアで販売されたが、当初は「西欧的」と評価されていたこと、加えて「時間通り」である点がイタリア人の印象に残つたこと、そして清張作品を映像化したものはイタリアで映画監督の名前とともに記憶されている場合も多いこと等が判明した。

次に清張とチャーシャの近似性について、両者を比較し世界的文学傾向の中に位置付けながら考察した。その結果、経歴や時代・社会背景に加え、社会構造への関心やノンフィクション分野への進出、共産主義に近い存在であつたことなど、両者に共通する点が多く挙げられることが判明した。また文学的な面では、純文学作家らが1940年代から60年代に探偵小説の手法を取り入れていった動きに、両者も関係しているのではないかと考えられる。

第18回

松本清張研究奨励事業 入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は18回目を迎えましたが、多様なアプローチの応募企画が寄せられました。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

第一線で活躍される入選者も増え、成果の蓄積が清張研究をさらに発展させています。今回の入選企画も、松本清張の活動の幅広さを示し、成果が期待されます。

企画名 松本清張の政治思想
— 言論界、大学、歴史記述

入選者 倉科 岳志 (京都産業大学准教授)

企画名 松本清張と森浩一
— 定説への挑戦と古代史ブームの牽引

入選者 深萱 真穂 (フリーライター)

第19回

松本清張研究 奨励事業募集

募集要項

- 対象** ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。
- 内容** 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成29年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

特別企画展

世界文学と清張文学



会場 記念館地階「企画展示室」

入場料 一般500円、中高生300円、小学生200円 ※常設展示観覧料に含む

おかげ様で好評をいただいております
会期延長
8月31日(水)
まで開催

『霧の旗』の翻訳者、来場

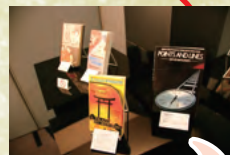


『霧の旗』を英訳出版されたアンドリュー・クリア氏をご来場くださいました!

来場者の声

※アンケートより

『世界文学と清張文学』
取材力、企画力に脱帽
しました。素晴らしいです!
千葉県 40代 男性



海外で読まれていることを初めて知りました。清張先生のイラストもとても味があり、感動しました。

北九州市 40代 男性

研究者からの反響

ポー研究者からは「これほどまでとは思わなかった」との声が寄せられました。今後は、日本におけるポーの受容史に、清張が大きく浮かび上がってくるでしょう。

シェイクスピア研究者からも「記念館には何度か来たが、今回の企画展は内容が本当に素晴らしかった。清張作品には英文学の影響を感じることがあったが、この企画展でそれが確信できた」と言われました。その方によると、シェイクスピアは不明な点が多い作家ですが、清張の描いたイラストは、かなり正確なものを元にして描かれているのだそうです。このようなことは、専門家でなければわからない貴重な指摘でした。



清張自身によるイラスト

大佛次郎からの手紙



西郷礼面白く読みました。懸賞小説の選も時々やらされるので知っていますが、これだけのものはなかなか見当らぬものです。御精

昭和三五（一九五〇）年、清張は『週刊朝日』六月号で募集された懸賞「百万人の小説」に、短篇「西郷札」を応募した。これが入選し、十二月に発表、翌年三月に『週刊朝日別冊春季増刊号』に掲載された。

松本清張が、作家としてデビューした瞬間だった。（紙の悪いノートに鉛筆で下書きをした）（※1）ものが、大手の週刊誌に活字となって掲載されたのである。しかも（岩田専太郎氏の挿絵で、さすがに朝日で、大家の画家をたのんでくれるものだなと感激した）という。

自分が書いた小説が、活字化されたことに勇気を得た清張は、「西郷札」が掲載された『週刊朝日』を、木々高太郎や長谷川伸、大佛次郎らに送り、激励の返事を受け取った。なかでも木々高太郎との縁は、「三田文学」へと繋がり、「或る『小倉日記』伝」の芥川賞受賞にまで展開するエピソードとして有名である。しかし今回は、大佛次郎からの手紙について紹介したい。

進を祈ります。気がついた点を申せば、結びの部分が一般の読者には物足りなく考えられるのではないかと言うことです。記録体の文章で終ったせいで詩をのがしたので余韻が残らぬ点です。作者はこゝへ来て不意に戸を閉めて了ったとしても言うのでしようか。高い読者にはこれだけでいじょうが、終止符のあとに何か舌の上に残るのもつよいと思いません。

文体は沈静なものがあり奥に隠れて目方があつて始めてのひとに珍らしいと思ひました。（※2）

改めて読むと、大作家からの大絶賛である。（文体は沈静なものがあり奥に隠れて目方があつて始めてのひとに珍らしい）とは、作品の特徴を捉えた評価で驚嘆する。また、一般の読者に対する指摘は、後の清張作品が示す傾向に通じており興味深い。

「鞍馬天狗」で人気を博す一方で、「パリ燃ゆ」「天皇の世紀」などノンフィクションを書いた大佛次郎。清張もその仕事に敬意を払っていた（※3）。清張を後押しした、貴重な手紙のひとつである。

（※1）（〜）引用はすべて『西郷札のころ』より。
（※2） 大佛次郎の書簡は、旧漢字旧仮名遣いを現代のものにし、句読点等補った。
（※3） エッセイ「私の黒い霧」（小説中央公論）一九六二年八月掲載に次の一文がある。
一九六二年八月掲載に次の一文がある。
「こういふノンフィクションの名手はやはり大仏次郎氏の『下レフエ事件』『詩人』『地獄』と、現在『朝日ジャーナル』に連載中の『パリ燃ゆ』であろう。ここまでくると、完全に記録文学である。こういう優れた文章の推理小説を書いたら、と思う。」

（専門学芸員 柳原 暁子）

昨年七月、本市内に残る官営八幡製鐵所関連施設を含む遺産群が、（明治日本の産業革命遺産）として、世界文化遺産に登録された。同製鐵所の創業前年（明治三三年）、伊藤博文の来所時、建設中の高炉前で撮影した集合写真がある。一昨年、デジタルデータ化により、写っている人物が特定されたとの報道があつた（※1）。初代総理大臣の伊藤を囲み、同じく長州藩出身の井上馨、地元実業家の麻生太吉、伊藤伝右衛門、安川敬一郎などが並ぶ。

自伝的作品「半生の記」には、清張が十八、九の頃（昭和二、三年）、八幡製鐵所の職人と文学的に交流し、習作を披露したとある。

その日の仲間（やば）に八幡製鐵所の職工数人がいた。いずれも私よりは七つか八つ年上の男で、彼らは実際に小説を書いていた。そんなことから私は、こういう人たちとつき合うようになり、ときどき自分の書いた短いものを見せたりなどした。

（文藝春秋『松本清張全集34』「半生の記」より）

当時の製鐵所は年間生産量百万トン計画が立案され、拡張期真っ只中であつた（※2）。八幡製鐵所に残るといふ伊藤博文寄贈の掛け軸には、二八八九年の憲法発布における感慨を詠たも



官営八幡製鐵所
写真提供：新日鐵住金株八幡製鐵所

の。このような詩を贈るあたりに、伊藤が国家構想という見地からいかに同製鐵所に期待していたかがうかがえる（※3）との言及がある。日清戦争の賠償金を財源に明治政府の肝いりで誕生し、需要増による追い風を受けて発展。まさしく近代化の象徴であり、郷土の誇りでもあつた。しかも操業開始と清張の誕生には、八年の隔たりしかない。育んだ土地柄が作家に及ぼす影響には、はかり知れないものがあるという。清張文学の重厚壮大さに製鐵所のイメージが重なるのはそのこと決して無関係ではないのかもしれない。

伊藤が暗殺された一九〇九（明治四二年）二月。同年二月、清張はこの世に生をうけた。清張が伊藤を描いた作品には、本連載でとりあげた「夏島」「史観宰相論」のほか、「統監」（昭和四年三月、「別冊文藝春秋」）がある。初代（統監）となつた伊藤に同行し、朝鮮海峡を渡つた新橋の芸妓を語り手とする構成からして、他の二作とは異なり、注いだ眼差しは幾分か柔らかない。

清張の父峯太郎は、（政治記事に多く興味をもつていた。（中略）その政治関心は基本的なものではなく、政治家の動静のようなものに一種の憧憬をもつて注がれていた。（「半生の記」より））とあるように、清張が生まれる二ヶ月程前に異国で非業の死を遂げた伊藤に対し、ひとかたならぬ思い入れがあつたのではなからうか。「史観宰相論」とびらに残る、（明治大正の政治談を好んだ亡父に捧ぐ）との献辞をみていると、父の思い出とともに、折に触れ書き留めずにはいられた人物のひとりではなかつたかと推測するのである。（終

（※1）西日本新聞二〇〇四年二月三〇日朝刊二面
（※2）新日鐵住金株式会社ホームページより。
（※3）「伊藤博文 知の政治家」瀧井博著二〇〇〇年、中公新書

（NK）

苗 作品の舞台を訪ねて

なつしま

「夏島」——明治史余滴

3 製鐵夢物語

せいてつゆめものがたり

くろずみ清張公園

今年3月末に、北九州市小倉北区黒住町にある公園の名称が、「黒住公園」から「くろずみ清張公園」に変わりました。これは、地元住民団体が北九州市に公園の名称変更を要望して実現したものです。

黒住町は、清張が戦争から復員した昭和20年から上京するまでの約8年間住んでいた町です。当時は、小倉市黒原営団という名称でした。この時期に、清張は朝日新聞西部本社に勤務する傍ら、デビュー作の「西郷札」や芥川賞を受賞した「或る『小倉日記』伝」などを執筆しています。また、当時長女が在学していた足立中学校の校歌の作詞もしています。

公園の面積は約3,200平方メートル、住宅街にある街区公園です。清張の名とともに、いつまでも地元で親しまれ愛され続ける公園になることと思います。



友の会 活動報告

朗読劇「蒼い描点」

5月28日(土) 参加者147名
記念館 屋外特設スタンド

劇団前進座による朗読劇は、今回で13回目となりました。年々人気が上がっており、友の会の春の事業として定着しています。今年も特設スタンドは参加者で一杯となりました。上演作品の「蒼い描点」は、箱根の温泉を舞台とした長編推理小説です。小倉城の石垣をバックに、日暮れとともに物語が進み、照明や音響が迫真の演技を引き立てます。初めて参加された方々からも、素晴らしかった、次回も参加したいといった声が寄せられました。

清張サロン

清張サロンは、清張作品や清張に関する話題をテーマとして、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流等を目的として開催しています。第7回と第8回は、記念館との共催として、友の会会員のほか一般市民の参加も募りました。いずれの回も講師の方々に分かりやすく掘り下げて解説していただき、とても充実したサロンとなりました。



第5回 3月24日(木) 参加者 26名 記念館 会議室

- テーマ：清張作品に登場する郷土の偉人
—伊藤常足(『太宰管内誌』)と
高崎節子のはなし—

- 講師：水口一志氏(遠賀町文化財保護委員)
柳原暁子氏(記念館・専門学芸員)

第6回 4月22日(金) 参加者23名 記念館 会議室

- テーマ：松本清張と筑豊
- 講師：中川里志氏(記念館・学芸担当主査)

第7回 6月18日(土) 参加者43名 記念館 地階ホール

- テーマ：小説「風紋」に読む清張自身の投影
- 講師：大津忠彦氏(筑紫女学園大学教授)

第8回 7月9日(土) 参加者65名 記念館 地階ホール

- テーマ：松本清張『古代史疑』と新邪馬台国論
—筑紫女王国による畿内邪馬台国の建都と印章の世界—
- 講師：久米雅雄氏(大阪芸術大学客員教授)

文学散歩「伊豆・天城越えと世界遺産を巡る旅」

5月15日(日)～16日(月) 参加者30名
1日目 静岡駅→三保の松原→葦山反射炉→井上靖文学館
2日目 旧天城トンネル→伊豆近代文学博物館→浄蓮の滝→三嶋大社

今回は、数々の清張作品の舞台として登場する伊豆方面への文学散歩を実施しました。最初の目的地、三保の松原は、羽衣伝説とともに小説「Dの複合」に登場しま



す。次に向かった葦山反射炉は清張も訪れたことがあり、その時の感想を「あの時代、こういうものが出来たのは、たしかに驚異である」と記しています。井上靖文学館では、井上靖と清張との共通点等を学芸員の方に解説していただきました。二日目は、「天城越え」に登場する旧天城トンネルを見学しました。旧道はバスが通れないため、駐車場から往復1時間以上歩きました。時間をかけた分、トンネルを見たときの感動が増した



ようでした。今回も、参加された皆様から「楽しい旅行ができた」「資料を見て清張さんの本を読みたくなった」などの声が寄せられました。

友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、
松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761



平成28年度

中学生・高校生

読書感想文コンクール

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■ 応募対象 全国の中学生・高校生

■ 課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「或る『小倉日記』伝」

(『或る「小倉日記」伝』新潮文庫、『西郷札』光文社文庫、『松本清張傑作短篇コレクション』〈上〉文春文庫)、『顔』(『張込み』新潮文庫、『声』光文社文庫)

「点と線」

(『長編ミステリー傑作選 点と線』文春文庫、『点と線』新潮文庫)

「高校殺人事件」

(『高校殺人事件』光文社文庫)

■ 応募方法

- 中学生、高校生ともに1,200～2,000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■ 応募締切 平成28年10月31日(月) ※当日消印有効

■ 応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2番3号
松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■ 選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ 発表 最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知表彰式を行います。
なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ 賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 図書カードその他

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限定させていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。過去の受賞者からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

●協力 モンブランジャパン

MONT
BLANC

万年筆「マイスターシュテック No.149」

記念館からのお知らせ

平成28年3月31日付で藤井康榮館長が退任し、同年4月1日付で名誉館長に就任いたしました。それに伴い、館長代行に丸田圭一が就任しております。

また、当館に関する助言・指導を行う市顧問が新設され、小野昭治が就任しております。

どうぞよろしくお願いたします。

●編集後記●

6月4日松本清張研究会での吉村法子さんの研究発表は、とても興味深い内容でした。イタリアの小説家レオナルド・シャーシャと松本清張は、奇しくも同じ1950年に作家デビューし、社会背景や社会構造に関心を持ち、ノンフィクション分野にも進出していったそうです。遠いイタリアと日本で同じような道をたどった二人の作家に、思いを馳せたとときでした。

記念館周辺の緑もよりいっそう深くなり、清張没後24回目の夏を迎えました。8月6日の開館18周年記念講演会には、ノンフィクション作家の保阪正康さんをお招きしています。講演のテーマは、『近・現代史と清張史観』です。講演の内容につきましては、次号で詳しくお知らせいたします。お楽しみに。(K.H)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉からはバスをご利用くださいと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

